

四条河原町のサウナ閉店

外資債権取得 リストロ

京都・四条河原町のサウナ店が閉店した。レジャー多様化の波をかぶって赤字が膨らみ、外資系企業に債権を買い取られた運営企業が系列店のリストロに乗り出した。「雇用を守れ」「閉鎖撤回」。従業員らは手書きの横断幕を掲げて、店での泊まり込みを続ける。最高齢71歳から44歳までの女性マッサージ師ら19人。「お客さんのためにマッサージを続けたい」と口をそろえ、閉鎖された店内で、厚いタオルを一枚一枚たたみながら、客の訪れを待っている。

(沢野未来)

むくんだ両手のどの指も、ごつごつした茶色のタコが盛りあがる。「昔は白くてきれいな手だったんだよ。すっかり手の指が変形しちゃった」。泊まり込みを続けている中田初子さん(70)は、マッサージ師歴数十年。その勲章ともいえる指のタコに胸を張る。

パチンコ店などを運営する第一物産(中京区)が経営していた「グリーンプラザ河原町店」(下京区)。10月1日に20年の歴史を閉じた。マッサージや宿泊施設、レストランなどを備え、バブル期には会社員らでにぎわった。近年、低価格

闘う女性マッサージ師

のスーパー銭湯や、シャワー付きのネットカフェに客を奪われ、赤字続きに。

昨春から夏にかけて、外資系投資銀行リーマンブラザーズの関連企業が第一物産の債権を取得。第一物産は赤字の圧縮を目指して、昨年6月に系列の山科店を閉じ、今年7月には西京区内と河原町店の

の2店の閉鎖も決めた。「私たちの生活はどうなるのか。反発した従業員らは個人加盟と話す。

確かに、店には流行の岩盤浴も、インターネットもない。けれども、古ぼけてはいてもピカピカに磨かれた床、なみなみと湯をたたえた湯船、真っ白なシートがしわ一つなく並べられたう段ベッドは、これまでと変わらず、疲れをいやす客を待っている。

「若い子のマッサージがいいで

19人 営業再開求め泊まり込み



客の訪れを待ちながら、タオルを一枚一枚折る。ベッドメイクも大切な日課だ(下京区のグリーンプラザ河原町店)

しょ、とお客さんに言ったら、『ほんまに、疲れをほぐしてもらいたいから来るんや。京都で一番うまいで』と言われたんだよ」。中田さんは言う。

「あのがどう、楽になったよ」というお客さんの笑顔で、世の中の役に立っている、がんばろうって思えてん」

同社は、系列パチンコ店やレストランへの配置転換を働きかけたが、従業員らは「マッサージ師こそが、私たちの仕事」と応じず、10月12日付で全員が解雇された。同社は店からの立ち退きを求めているという。

ベテラン70歳「お客さんの笑顔励みだった」